3-3-5　新しい学問と化政文化

滑稽本（「東海道中膝栗毛」）

＊小田家文書（柳井市金屋）和漢334「東海道中膝栗毛」
小田原の宿で五右衛門風呂に入る喜多八の図

解　説

江戸時代中期以降，文化の中心は上方から江戸に移り，貸本屋の隆盛もあって大衆娯楽文学も大いに普及しました。遊里での遊び方を中心に描いた「洒落本」，滑稽な言動や下ネタなどで笑いを誘った「滑稽本」，町人たちの恋愛模様などを描いた「人情本」，勧善懲悪や因果応報をテーマとした伝奇小説の「読本」などです。また，絵を中心とした黄表紙や合巻などの「草双紙」も多くの読者に支持され，明治中期に至るまで制作され続けました。

写真の「東海道中膝栗毛」は1802（享和2）年から1814（文化11）年にかけて初刷りされた十返舎一九の滑稽本です。名所・名物紹介に終始していた従来の紀行物と違い，栃面屋弥次郎兵衛と旅役者の喜多八の旅先での失敗談や庶民の生活・文化を描いた本書は絶大な人気を博し，シリーズ化されました。地方の人々も，これらの出版物を通じて都会の文化や広い世間に触れるようになりました。

＊当館の小野家文書951～957には，読本の代表作ともいえる曲亭（滝沢）馬琴の「（南総）里見八犬伝」の一部があります。江戸文芸の多くは文学全集などで活字化されていますが，繰り返し読まれた和装本には，活字にない味わいがあります。

山口県文書館所蔵アーカイブズガイド学校教育編
目次に戻る